「底が突き抜けた」時代の歩き方　340

資本主義国家に成り損ねた独裁体制の北朝鮮

ナチス・ドイツにとってユダヤ人は滅ぼすべき相手であった。厳密にいえば、ナチス・ドイツが組織的に虐殺したのは６００万のユダヤ人以外に、政治犯、精神障害者、カトリックの政治犯、ジプシー、同性愛者など６００万人を含んでいた。ユダヤ人を民族的異端者としてみるなら、それぞれが政治的、精神的、宗教的、身体的、性的異端者とみることができるかもしれない。いうまでもなくナチス・ドイツにとって、異端者とは劣等者の別名にほかならない。ユダヤ人を筆頭に異端の烙印を押された者は、ナチス・ドイツにとっては抹殺の対象であった。しかし、「異端」とは滅ぼされるべき相手なのであろうか。身体的に抹殺してしまえば、「異端」（的存在）は二度とこの地上に現れることはないのだろうか。

ドイツ人とユダヤ人は民族的に異なるから、なるほど、宗教的にも生活慣習的にも異なる。そんなことは当たり前だ。ドイツ人とフランス人、イギリス人……が当然異なるように、差異を基準に大きく分類していくなら、人は他人との差異によって成り立っていることに気づく。もちろん、異質性に気づくことは同質性に気づくことである。同じ人間であるという同質性を前提とすることによって、異質性というものが際立ってくるからだ。人と犬の異質性が一般に問われないのは、人と犬の同質性を一般に問わないからである。したがって、異質性が問題にされる時は同質性が問題にされる時だといえる。ナチス・ドイツがユダヤ人を異質性として排除した時、ナチス・ドイツは自らの同質性を確認していたということだ。つまり、自らの同質性を改めて確認するために、ナチス・ドイツはユダヤ人を異質性として排除することになったといえるかもしれない。

異質性を排除し抹殺することによって同質性を際立たせることは、異質性の消滅によってしか際立たせることのできないような同質性にほかならない。いうまでもなく異質性の消滅は同質性の消滅である。異質性なしに同質性もありえないからだ。もしナチス・ドイツが彼らの周辺から一切のユダヤ人を消滅してしまったならば、彼らは自分たちの同質性をどのようにして確認し、際立たせるのだろう。異質性を消滅させることによってしか際立たせることのできないような同質性の確認であるなら、そのような同質性の確認行為がたえず異質性を呼び込みつづけることになるのは必然であろう。ユダヤ人が周囲からすべて一掃されてしまった時点で、ナチス・ドイツは自らの同質性の中から〈ユダヤ人的なるもの〉を産みだしつづけるのは避けられない。かくしてユダヤ人を消滅させている時にはほとんど目立たなかったドイツ人が、〈ユダヤ人的なるもの〉とし

て浮上してくるにちがいない。

このように考えると、ナチス・ドイツが台頭してくることによって、消滅させられるべきユダヤ人も初めてドイツ人の前に台頭することになったといえるかもしれない。ドイツ人はナチス・ドイツによって初めてユダヤ人を発見し、自らを発見したのかもしれない。自分の外にユダヤ人を発見したドイツ人が、自分の外にもはやユダヤ人を見出しえなくなった時、自分の内に 〈ユダヤ人的なるもの〉を発見するに至るのは必然的である。というより、〈ユダヤ人的なるもの〉を見出すことによってしか、ドイツ人はドイツ人たりえないという場所へと自らを追い込んでしまっているからだ。

歴史的な事実としていえば、ユダヤ人を全滅させる前にドイツ人自らが敗退させられしまったが、その段階でのドイツ人は自らの中に〈ユダヤ人的なるもの〉の存在を未だ見出してはいなかった。自らの内に見出される〈ユダヤ人的なるもの〉の存在は、スターリニズム体制によって明瞭となった。そこでは、異質性は敵としてはっきりと意識されることになった。〈奴は敵だ、殺せ〉である。ナチス・ドイツにとってユダヤ人は異質性として際立たされることはあっても、その異質性が敵としての意味あいを帯びることのないまま収容所へと送り込まれることになったが、スターリニズム体制下では異質性は敵そのものとして収容所へと送りこまれることになった。注意すべきは、異質性が敵としての意味あいを帯びるようになったとき、その敵はスパイとしての意味あいをも帯びるようになったことである。

ナチス・ドイツが自分の外に存在させようとするユダヤ人は、異質性ではあっても敵とはなりえない分だけ、スパイにもなりえなかった。敵が味方を装ってスパイとして自分たちの中に入り込んでくるという発想は、〈ユダヤ人的なるもの〉として自分たちの内に異質性を見出さざるをえなくなるスターリニズム体制下において初めて具体性を帯びてきた。ナチス・ドイツが自らをそそり立たせるためにユダヤ人を異質性として不可欠としたように、スターリニズム体制もまた、自らを存続させるために、自らの内に敵=スパイを不可欠としたのである。もちろん国民の中に見出される敵＝スパイは『収容所群島』に多くのケースが収録されていたように、何の根拠もなく全く権力の恣意によるものにほかならなかったが、隣人が敵=スパイとしていつでも突然逮捕されて、収容所へ放り込まれる監視体制が恒常化しているということが肝心であったのだ。

ナチス・ドイツやスターリニズム体制に共通するのは、超越的な独裁者が歴然としているという事実である。ヒトラー然り、スターリン然り、毛沢東然り、金日成・金正日父子然り。彼らが超越的な独裁者であり、絶対的な存在であるのは、法の上に位置しているからだ。つまり、彼らの言葉や指示そのものが法（の根源）として君臨しているのである。拉致問題や核開発に関する金正日総書記の発言の恣意性そのものが法にほかならないように、独裁者の気まぐれな発言すらも法を構成してしまうのだ。

超越的な独裁者にとっての最大の関心事は、自らと肩を並べるまでに伸し上がってくるかもしれぬ存在であり、自らの超越的な位置を引きずり降ろすかもしれぬ存在である。

スターリンが独裁者としての位置を確立するためには、まず自分と肩を並べている政敵を抹殺する必要があった。ジノビエフとプハーリンを銃殺し、国外追放していたトロッキーをメキシコで暗殺した。そして自分の側近を次々と粛清していった。独裁者は遠くに孤立して聳え立っていなければならなかったからだ。側近の粛清はその側近につながる関係者の粛清にまで広がっていき、自分のような独裁者を産みだした大海（国民）へと下ることが避けられなくなっていく。

独裁者は自らが独裁者として君臨し存続しうるのに最も都合のよい単一の思想と価値観を国民に流布し、彼らを染め上げようとする。自らを独裁者として神輿（みこし）を担いでくれる膨大な国民抜きには、独裁者としての位置は確保できないからだ。独裁者を支える思想と価値観に即して繰りだされる指示や言葉は、そのとき法そのものと化する。金日成が立ち上げた「主体」思想とは、他の世界観に関心を払わなくなった国民のすべてが金日成の考えと一致していけば、自分の独裁者としての位置は永久に保証されるような唯一思想であった。もちろん、あらゆる思想は他の異なる思想との対立の中でこそ育まれるものだから、他の思想を遮断した「主体」思想を国民が受け入れるためには、各々が自分の考えや思想を自分の頭の中からすべて叩きだして空っぽにしなくてはならなかった。他の思想との交わりを歓迎しない「主体」思想は、国民一人一人の考えや思想の中で受け入れられ、発展させられていくような開かれた思想ではありえなかったからだ。

しかしながら、人は自分の頭で考え、行動し、物をいおうとする自然な欲求を持っている。他の考えと出会う中で自分の考えを是正していくことで、見通しのよい生きかたを築き上げていこうとする存在である。全体主義的な独裁体制下ではだが、自分で考えることは許されなくなる。自分の頭で考える者は外から押しつけられてくる考えと衝突し、自分で納得しないかぎり受け入れないからだ 。スターニリズムであれ、毛沢東思想であれ、金日成の主体思想であれ、国民の中に自分の頭で考える人が多くなればなるほど、彼らの唯一思想は別の思想によって相対化されて受け入れ難くなる。唯一思想にとって自由に頭で考える人ほど始末に負えない存在はない。唯一思想から必ずはみだすからだ。したがって、唯一思想にとって彼らのような存在は敵になる。敵に対しては暴力によって無理矢理唯一思想を受け入れさせるようにするか、然らずんば身体を抹殺する以外にない。

全体主義的な独裁体制下では、国民は常に拉致状態か逮捕状態に置かれている。身体的に拉致されたり逮捕されている状態になくとも、唯一思想によって人々の頭は常に支配されている。中国に〝鯛は頭から腐る〟という諺がある（らしい）が、そう、人間も頭から腐っていく。唯一思想は人々の頭を腐らしていくが、頭が腐らない者は収容所にぶち込むか、処刑することによって身体を腐らせようとするのだ。独裁者は自らの唯一思想を受け入れない者を身体的に滅ぼそうとするが、それは独裁者を独裁者たらしめている唯一思想がすでに死滅している思想であることを逆に照らしだす。なぜなら、思想には思想を、考えには考えを、言葉には言葉を、という人間の本来的な精神活動を唯一

思想は認めないからである。つまり、人間の精神活動を認めないことによってのみ、唯一思想は大手を振ることができている。

スターリンが支配したソ連邦も、毛沢東が支配した中国も、金日成が支配した北朝鮮も、一様に社会主義国であるとか共産主義国であるとか呼称されてきた（今も呼称されている）が、正確にいうと、全体主義的な独裁体制であって、少なくともマルクス（たち）が資本主義経済社会の揺籃（ようらん）期に資本主義体制における人間の桎梏を乗り越えようとして、理念的に思い描いてきた社会主義社会や共産主義社会とは全く異なる。以て非なるどころか、見かけが似ていることすらない。一言でいえば、スターリンや毛沢東や金日成は資本主義社会を自らの独裁体制の維持のために否定したが、マルクスは資本主義社会をけっして否定しなかった。むしろ、人類が歴史の自然過程として歩んだ最高の発達段階として評価さえした。つまり、人間の欲望を自然に募らせていくなら、資本主義社会に行き着くのは必然であるという意味で評価したにすぎなかった。

いわば、船に乗せられた人類が古代社会や封建社会を潜り抜けて、行き着いた最後の港が資本主義社会であった。これから先の航海は自分たちの手で新しく船を作って資本主義社会から出港しなければならないと、マルクスは予見的に説いたのである。資本主義社会以前の歴史は人間にとっての前段階にすぎず、社会主義へと踏み入ることによって人間にとっての真の歴史が始まると著作に書きつけた。もちろん、資本主義から社会主義への飛躍には、封建主義から資本主義へとなだらかに突き進んできたような必然性の一本道が用意されているわけではない。社会主義は資本主義を踏み台にしてジャンプするほかないけれども、資本主義は別に社会主義へ至るための通過点であるわけではなかった。社会主義を資本主義の次の新たな社会段階として宗教的に夢見ている人々は、資本主義が内に孕む社会的矛盾の解決しがたさによって不可避的に社会主義が産みだされるに至ると無邪気に思い込んできたが、資本主義は自体の矛盾を緩和する柔軟性をしぶとく備えていることをみなかった。

マルクスは歴史の無意識の終焉として辿り着いている資本主義と、歴史の意識として構築されていくことによってしか始まらない社会主義との間に無限に横たわっている深い裂け目をたえず意識していた。可能性としての人間なら、この裂け目を克服するにちがいないし、克服しなければ人間は未来を自分のものにはできないと確信していたのだ。マルクスが資本主義を評価するのは、これまでのどの体制よりも人間の自然な欲望が恣意的に発揮されやすく、人間の精神活動が展開される基盤が大きくなっているからである。マルクスが資本主義を評価しないのは、貧富の大きな落差や先発の資本主義国家が後発の資本主義国家を食い物にする避けがたい矛盾以外に、人間としての全体的な価値が部分的にしかすぎない経済的な側面でシビアに切り取られてしまうからだ。つまり、資本主義社会では万人が裕福になることができず、多数の貧困の上に一部の富裕が咲き誇っており、そして人間の本質は非経済的な要素をより多くかかえこんでいるのに、資本主義社会は経済的人間としてのみ突出させられていくといった矛盾、歪みを前提とし

ているのだ。

資本主義は第一義的に人間を経済的人間として評価する社会システムにほかならない。したがって、人間の自然な欲望の発揮も人間の精神活動もすべて、資本の論理による拘束を受けないわけにはいかず、不自由であるということだ。人間を経済的人間として大きく評価する資本主義システムは当然ながら、人間の能力を経済的な側面で評価し、人間の才能を経済的活動にむかってより大きく引きだそうとする。いうまでもなく人間は経済的人間として存在しているだけでなく、トータルに存在しようとしている。資本主義社会では人間はあまりにも経済的人間であることが最優先されているために、トータルに存在することができないという根源的な不自由を味わわなくてはならない。マルクスは人間が経済的人間であることから解放されて、トータルに存在することができるようになる社会として社会主義－共産主義を位置づけたのである。人間が経済的自由を勝ち取るために資本の論理が支配する戦場に赴かなくてもいいような、人間が総体として存在することができる自由を社会主義に求めたのだ。

冷戦下のソ連、東欧圏、中国、北朝鮮は、資本主義国家にまで成熟するには至らない国家社会主義経済に貫かれた全体主義社会にほかならなかった。帝政ロシア最後の皇帝ニコライ二世を倒したロシア革命は、スターリンを人民の名のもとにツァーリの位置にすげ替えただけのことであった。毛沢東もまた、中国革命によって新たな皇帝の座に君臨することになっただけである。しかし、北朝鮮の金日成に至っては革命とも無縁に、ソビエト軍の将校であった金成桂が抗日運動の指導者として活躍した神話的存在の金日成を名乗り、スターリンの傀儡政権として多くの政敵を粛清して朝鮮半島の北部を支配したにすぎなかった。要するに、これらの独裁者たちは資本主義社会では達成することのできない理想的な社会主義国家の建設を目標に掲げながら、独裁のかたちとしては理想的に国民を抑圧し、収容所に放り込み、人間の精神活動を萎縮させていったのだ。

資本主義が資本の論理展開の必然性に従って、人間の欲望を縦横に引きだして開花させていく繁栄とさまざまな成果を享受し、その豊かな物質的基盤を前提とすることによってしかありえない社会主義社会に、資本主義を否定しながら辿り着こうとするのだから、「いい暮らし」ができている資本主義社会に対抗するためにも、独裁が強化されることによってますます遠のいていく理想社会の夢に人々は耐えるほかなかった。冷戦終焉によるソ連邦崩壊後のロシアは独裁的な全体主義体制から抜け出て、資本主義システムの導入に四苦八苦し、独裁的な共産党政権下の中国は生き残りをかけて自由経済に踏み切った結果、あれだけ敵視した資本家と経営者の入党拡大を図りながら、世界の資本主義市場を脅かすまでの「巨龍」に成長するに至った。哀れなのは、独り取り残されている金日成の北朝鮮であった。冷戦下の支持者で保護者であったロシアや中国からも見放され、自由経済を導入する社会資本すら北朝鮮では整備されるに至っていないからだ。

ロシアや中国が独裁体制から急速に脱しつつあることと、資本主義経済の導入を加速させていることとはパラレルな関係にある。なぜなら、資本主義と独裁体制とは本来的

に相容れないからだ。資本主義は多様な新しいアイディアに基づいてたえず革新しつづける社会を不可欠とするのに、独裁は唯一思想に順応させることによってしか存続しえないという根本的な違いがそこには横たわっている。資本主義を導入することはそれに伴う新しい思考を導入することであり、唯一思想に反するような新しいアイデアを弾圧するところでは資本制生産は根づかない。更に資本主義は下からの改革のエネルギーを不可欠とするので、主体思想という独裁者しか主体的に振る舞えない北朝鮮の現状にも全くそぐわないのだ。

資本主義の利点を洞察していたマルクスはしたがって、資本主義は否定されるべきではなく、乗り越えられるべきだと説いた。乗り超えは唯一、革命によってしかありえず、その革命は資本主義社会を引っくり返すのみならず、その社会に乗っかって生存してきたすべての人々の資本主義的な存在様式をも同時に引っくり返さなくてはならない、と主張した。あらゆる資本制生産様式と資本主義的存在様式を同時に引っくり返すことは、一回の革命で済まされるような簡単なことではありえなかった。革命は永続的に行われねばならなかった。革命を更に革命していく事業が不断に問われつづけていたのだ。マルクスが革命について語るとき、それ故に永続革命的な性格を帯びているのは当然であった。

高度に発達した資本主義社会における経済と文化を前提とすることによってしか社会主義の理念は成就されえないことを自明としていたマルクスと、資本制生産様式が萌芽的段階にとどまっていた前近代的な社会の渦中で資本主義の悪とその乗り超えのマルクスの考えの部分のみを大きく受け継ごうとしたレーニンたちとでは、そもそも立っている場所が当初から隔絶していた。一言でいえば、マルクスの考えが受け入れられる現実的な基盤はソ連にも中国にも皆無であった。しかしながら、マルクスの考えを受け入れる現実的な基盤があろうがなかろうが、考えは観念として伝達され、影響を受けることはできる。マルクスの考えに影響されたレーニンがその影響をできるだけ現実に近づけようとするなら、現実に合わせてマルクスの考えを修正しなければならなかった。そう、レーニンが学者であったなら、現実の変革を課題とせずにマルクスの考えにどこまでも純粋に近づいていくこともできたかもしれないが、革命家としてマルクスの考えに近づこうとしたために、マルクスの考えを自分のほうに近づけねばならなくなっていた。

したがって、ロシアではマルクスの考えはレーニンの中で濾過(ろか)されたマルクスの考えとして大きく掲げられ、革命運動の理論としてかたちづくられていった。ロシア革命の指導者として最高権力者の座に就いたレーニンは、もちろん、革命が社会主義革命でもなんでもなく、単なる前近代的な社会の転覆を成就させた権力奪取にほかならないことを自覚していたが、疲弊した国力とロシアを取り巻く帝国主義列強の脅威に晒されて、掌握した国家権力を失わないようにするのに精一杯で永続革命どころではなく、権力基盤を強化することに全精力が注がれていった。また実際に、一国革命では本当の意味での社会主義社会の建設は理論的に不可能であった。権力基盤ばかりが強化され、政権党

による反対派や富裕層への粛清の嵐が始まる中で死去したレーニンに取って代わってスターリンが登場し、恐怖と残忍なスターリン時代が彼の死去まで打ち続くことになった。

ここで留意すべきなのは、いくらロシア革命が世界初の社会主義革命と輝かしげに賞讃され、ソ連国内で社会主義的と称される施策が次々と打ち出されていったところで、帝政ロシアがマルクス主義を掲げる政党に取って代わられただけであって、現実は理想の社会主義社会とは全く反対の苛酷な圧制が敷き詰められていった。敵と戦ううちにしだいに敵に似てくるとよくいわれるが、ソ連の場合も全く同じであった。帝政ロシアの秘密警察と熾烈に戦っているうちにソ連はかの秘密警察的的手口をそっくりそのまま踏襲し、それはスターリン時代に完成されていった。ソ連以降の後発（国家）社会主義国家である東欧圏も中国も北朝鮮も、秘密警察が完成されたスターリン時代のソ連を手本として国家造りが着手され、本家のソ連同様、理想の社会主義社会建設は永久に遠のき、人々の精神活動を萎縮させる耐えがたい抑圧だけが張りめぐらされていった。

世界的な資本主義経済の矛盾が激化する中でロシア革命が起こってしまったとき、マルクス主義の政権党が資本主義の矛盾に直面することなく、理想の社会主義へと到達しようという考えを宿すことになっても別に不思議ではないし、いやそれどころか、そうしようと動きだすのは不可避ですらあった。高度に発達した資本主義の成果を媒介せずには社会主義はありえないと説いたマルクスの主張から大きく逸脱することになるかもしれないが、ソ連は資本主義を経由せずに社会主義へと移行せざるをえなくなってしまったのである。歴史的な大実験ではあったが、それがどのようなところへと行き着いて無残な結果に終わってしまったかは、今更説明するまでもない。後発資本主義の発展途上国で国家社会主義国家の建設が目指されるのは、後進の資本主義国は先進資本主義国によって食い物にされ、解消しがたい矛盾の渦中に叩き落とされるのが明白であったからだ。

いま思えば、ロシア革命は座礁する運命に導かれていた。歴史は失敗をめざす、ということの典型であった。歴史はその失敗の中にレーニンたちを無理矢理放り込んだのである。どのように失敗するかだけを歴史は冷徹に観察しつづけたのだ。そのために膨大な人々は歴史の失敗に呑み込まれ、筆舌に尽くしがたい生命を落としていくことになった。ソ連邦や東欧社会主義圏の崩壊はマルクスの思想や主張からの離反を加速させていったが、もちろん、それは離反のほうが間違っていた。ロシア革命の失敗はむしろ、マルクスのいっていたことが正しかったことを立証してみせたのである。先進資本主義社会の中からしか社会主義への途はありえないことが、改めて大きく浮き彫りにされたのだ。高価な代償を支払って。

ここまで書いてきたところで評論家の佐伯彰一が、北朝鮮の映像では市内バスの乗客たちによって「われらが偉大なるリーダー金正日国防委員長」を称える歌が整然とコーラスされる情景に出会ったり、７０年代半ばの文化大革命推進最中の中国では「偉大なる毛主席」讃美の長々しい「演説」が溢れ返っていたり、「アジアの共産主義には、や

はりかなりユニークな、しかも共通の特色が認められるのであるまいか。」ソ連や東欧の共産圏はすでに消滅してしまっているのに、「アジアの共産主義国は、かなりの変貌は見せながらも、フシギなほど『健全？』に生きのび、いまだに命脈を保っている」のはなぜか。あれほど以前は喧(かまびす)しかったマルクス主義経済学の教授たちにその特異性について解明してほしいものだ、と皮肉をこめながら語っている。

私はマルクス主義者でも学者でもないので、佐伯彰一の疑問に答える任にはないが、ジャーナリストの萩原遼が『文藝春秋』（０２．１１）の中でこう記している。

「１９８９年、将来の北朝鮮崩壊に際して金正日はチャウシェスク夫妻のように民衆に殺されるかもしれないと恐怖に震えた。殺される前に殺さねばならないと考えた。生き残りのために生死を賭けた戦争に乗り出したのである。金正日は敵対階層６００万人の抹殺計画を立てた。餓死数である。彼はまず敵対階層の人民の住む地域である山間部や僻地の慈江道や咸鏡南道への配給を減らしていった。これは１９８９年から９０年までソ連の新聞『コムソモルスカヤ・プラウダ』の平壌特派員だった前出のアレクサンダー・プラトコフスキー氏が書いている。

『北政権は国民を反抗に立ち上がれないようにするために飢え続けさせた、と考えるのは十分可能である』（前掲書）

金正日は敵対階層の６００万人を敵として対した。抵抗の気力も起こらないほど栄養失調と飢えでフラフラにするよう食糧を減らしていった。それと併行してアメリカを核で脅す擬似的戦争で北朝鮮国民すべてをだまして食糧危機の批判をそらしてアメリカから多大の戦果を得た。正面の敵から一応の成果を得て真の敵である北朝鮮の敵対階層との戦争にうってでた。９６年末に敵対階層の住む地域の食糧配給を絶った。この事実は『北朝鮮の大飢饉』の著者であり、国連を通じて北朝鮮への食糧援助を平壌でおこなっていたアンドリュー・ナティオス氏がこう書いている。

『北朝鮮政権は１９９６年末に、党幹部、重要産業の労働者、軍と保衛部の幹部、および首都の市民だけに配給をおこなう決定を下した』（米平和研究所２００１年刊、邦訳なし）

この記述は、１９９６年と９７年に爆発的に餓死者が急増している事実と符合する。」

９４年７月に金日成の死去によって金正日が北朝鮮の最高権力者の座に就くやいなや、翌９５年の１月１日より先軍政治を敷き、党よりも軍を優先し、金正日個人に忠誠を誓わせることによって金日成死後の不安定な時期を切り抜けようとした。人口２千万人の北朝鮮で朝鮮人民軍は最低でも１００万人と見積もられ、２０人に一人が兵士という世界随一の軍事国家であり、その軍事独裁体制の強化によってソ連や東欧のような全体主義的な独裁国家の崩壊を防止していることがわかる。もちろん、そのような体制の存続が食糧危機や脱北者の増加によって揺らいでおり、風前の灯であるのは目にみえている。ここでもマルクスなら、無知が栄えたためしはないというにちがいない。

２００２年１１月２１日記